



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域における舞台芸術創造活動の展開過程
Author(s)	細川, 美香; Mika HOSOKAWA
Citation	社会教育研究, 20, 55-78
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28542
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P55-78.pdf



地域における舞台芸術創造活動の展開過程

細川美香

1. 課題と方法

「心」の荒廃が叫ばれている今、芸術の表現や鑑賞による「心」の豊かさへの作用は大きいと思われる。特に音楽や演劇などの舞台芸術はその「場」を共有しないと体験できないもので、それらが身近にある環境は全ての人にとって必要であると考えられる。しかし未だ芸術の公共性が広く認められているとはいえ、大都市と地方で生の舞台芸術に触れられる機会の差も歴然である。

佐藤一子は、「国民の学習権」に即して国民の文化的享受の権利を訴え、1970年代から活発化した子ども劇場・おやこ劇場の運動や音鑑・演鑑など市民による文化運動を、人々が文化的享受の権利を取り戻すための協同による運動として高く評価している¹。

芸術文化の公共性を保証する文化行政も1970年代から本格的に始まった。1990年代には、館を貸すだけで事業を持たないホールに対する批判、「自主事業」の必要性が唱えられるようになった。森啓は自主事業の5つの類型²を挙げ、地域で文化活動をする人との連携や「支援」「育成」の重要性を提起している。また、近年文化行政における「アートマネジメント」が注目を集めている。アートマネジメントとは一般的に、芸術活動や団体の合理的な運営・経営、芸術と社会を結ぶ活動のことであり、利光功によれば、「芸術作品を作る人と見る人をつなぐ活動」のことをさす³。公共ホールの自主事業も、作る人（外部から招聘するプロのアーティストや地域で芸術活動を行う人）と見る人（観客となる市民全体）を結ぶアートマネジメントの活動であるといえる。

ところで、従来「地域の文化創造活動」とは市民が趣味的に取り組む活動であり、その芸術性を高めるための「支援」も創造するほうの市民のためと理解され、そこに鑑賞者は想定されていなかった。公共ホールの招聘事業や市民の鑑賞運動においても、鑑賞の対象になっているのは中央のプロの芸術家であった。しかし実際は、地域のアマチュア団体が活動を高めたいと思う場合には、地域の鑑賞者にしろ中央の評論家にしろ誰かに鑑賞されることが視野に入っているのではないだろうか。劇作家・演出家の平田オリザは「地域の芸術文化活動の核となる人材を育てることが必要だということだけは間違いない。（中略）無医村克服の次は、無演劇人村をなくさなければならない」と述べている⁴。地域における舞台芸術の創造は、創造する市民にとって有益だけでなく、鑑賞の対象としても必要だといえる。

本論文では、地域で鑑賞されることを目的とした質の高い芸術を目指して活動に取り組んでいる人を「地域のアーティスト」と呼ぶ。実際にはどのように地方でアーティストが育っているのか、

どのように観客との関係をつくっているのかを実証し、その上で支援の方向性をさぐることを本論文の一つめの課題とする。

また、地域の公共ホールにおける演劇などのワークショップ⁵、地域の歴史を題材にした市民劇等の舞台制作も近年盛んである。地域で取り組む市民参加型の芸術活動は、最近では「コミュニティアート」と呼ばれている。これらを地域に合ったものにするには、行政や市民を含む地域の人が話し合って独自の方法と意義を見つけ出さなくてはならないだろう。さらにこのような活動は、地域にアーティストがいることによって、1回きりプロの芸術家を招聘して取り組むものとは違い、継続性と発展性をもった活動として成り立つ。コミュニティアートの固有の意義とその展開過程、地域のアーティストや行政、公共団体が果たす役割を明らかにすることを二つめの課題とした。

調査対象は、財団法人北海道文化財団による事業「北海道舞台塾」である。この事業の大会要綱に掲げられた目的⁶によると、地域の舞台芸術の人材育成と参加の拡大、公共ホール活性化を目指した事業であることから、本論文の課題を論証できると考えられる。また、北海道舞台塾の開催地の一つである帯広市に焦点を当て、舞台芸術活動の構造、劇団員の活動に対する意識、市民参加型創造活動の展開を分析する。

2. 北海道舞台塾の概要⁷

1994年、北海道の文化の振興をめざし、文化行政の総合的・積極的な推進を図るために制定された「北海道文化振興条例」および「北海道文化振興指針」をうけ、財団法人北海道文化財団（以下「文化財団」）が設立された。文化財団では、道内全体の文化活動・自治体文化行政に対する資金的・技術的サポート、道民が鑑賞でき中央でも認められる質の高い芸術の創造に取り組んでいる。

北海道では道立劇場の建設が計画されていたが、厳しい財政状況からハードの整備が先送りになっていたため、道の文化行政では1997年頃からソフト面の整備を模索し始めた。担当者が道内市町村の文化行政の状況を調査した結果、近年新しい文化ホールが各地に建設されたが、自主事業を活発に継続していくノウハウのない所が多いことが明らかになった。そこで、道立劇場・地域のホール活性化及び裾野の拡大を目指した人材育成、行政と市民とのネットワーク形成を目指した事業を計画した。その際に注目した活動が日本劇作家協会⁸の行う「日本劇作家大会」であった。日本劇作家大会は、一般市民を対象に演劇に関するワークショップやシンポジウムを行い、芸術としての向上と裾野の拡大をめざす大会である。これを1998年に札幌市に招致し、第1回「北海道舞台塾（以下「舞台塾」）」との共催として行うことが決まった。各地域で実行委員会を設け、原則3年間の地域大会⁹も行うことになった。

札幌を会場として行う「北海道大会」は北海道全体の大会としての位置づけであり、北海道文化

財団が事務局を持ち、民間の文化団体などが実行委員会に入って企画・運営をしている。地域大会の実行委員会も自治体職員、地域の文化団体などで構成されている。内容は主にワークショップやシンポジウム、舞台発表である。ワークショップでは日本劇作家協会などから招聘したアーティストが講師を務め、表現や舞台技術など、芸術活動に取り組む人が資質を向上させるためのものや、素人が芸術に親しみ楽しむためのものが開かれている。ここで行ったワークショップから必要なものを選び、各地域のホールの今後の自主事業で取り組んで欲しいという狙いもある。また、有識者による演劇や舞踏、アートマネジメントに関するシンポジウムも開かれている。舞台発表は、有名なアーティストの発表を鑑賞したり、地元の団体が発表し交流する場、市民がこれらを知る機会となっている。

全体の流れとしては、最初の年に行った上川、函館、釧路では始めのうちは事業に対する抵抗があった。2年目から事業に加わった十勝は組織的な企画・運営と、それぞれの自治体で特色を出した事業を展開している。北見も地域にあるものを生かし、「オホーツクを一つの舞台として」とりくんでいる。北広島は市民によるホールの運営を模索していた。3年目から加わった富良野は富良野塾の存在で注目を集めており、舞台塾は2000年にオープンしたふらの演劇工場のソフトの支援を目的としている。西胆振は、最初は有名な公演を中心として行っていたが、住民のニーズとかがみ合っていないと考え、従来の文化活動を基本とした事業にシフトしている。

事業実施の基本単位である自治体別にみると、ホールの運営は行政の他、財団法人に委託している所、市民が運営委員として参加している所、NPOが運営の主体になっている所があった。大半の地域ではサークル的な文化活動が盛んに行われており、彼らによってホール建設の運動などが行われていた。特に人口の多い都市では、鑑賞者を意識した活動も活発に行われている。舞台塾の実行委員会にもこういった活動に携わる団体が参画している。そこで、市民の活動がどのように関わったかをもとに6タイプに分け、事業がどのように運営されたかを分析する。地域で継続的に創造型活動を行うことを目的とした事業を「アーティスト育成のための事業」、一般市民が体験するための事業を「一般市民向けの事業」とした。

① 行政

	アーティスト育成のための事業	一般市民向けの事業	
		講師：地域アーティスト	講師：外部アーティスト
芽室町(十勝)	ダンス、パントマイム、舞台技術ワークショップ 町民演劇公演		招聘公演、講演
登別市(西胆振)	邦楽コンサート		招聘公演、高校生ワークショップ

町民参加の演劇や既存のサークルが合同で参加する事業を行い、市民が関わる創造型活動の裾野の拡大・育成、ネットワーク化をめざす。「地域のアーティスト」を育成するきっかけづくりの事業といえる。

②創造団体

		アーティスト育成のための事業	一般市民向けの事業	
			講師：地域	講師：外部アーティスト
釧路市	演劇協議会	地元の劇団公演、劇団＋一般参加の公演 ワークショップ6種 セリフを書く～3分間の一人芝居（日本 青少年演劇作家会議）		講演

盛んに活動している演劇協議会が企画し、劇団のレベルアップを図るための事業を行った。単独で運営する事業に限界を感じ、舞台塾終了後はそれまでの地道な活動を継続している。

③マネジメント団体

		アーティスト育成のための事業	一般市民向けの事業	
			講師：地域のアーティスト	講師：外部アーティスト
富良野市	ふらの演劇工房	支える人材づくり (舞台技術、 映写技術、 ドラマづくり)	次代を担う人づくり(演劇アカ デミー、高校生演劇ワーク ショップ)演劇リハビリテー ション事業(指導者ワーク ショップ、高齢者と幼稚園児 ワークショップ)	演劇・音楽に親しむ事業 (市民劇、演劇ワーク ショップ、朗読、和太鼓、 手作り楽器)ボランティア 講習会津軽三味線公演

演劇のまちづくりをめざして1998年に立ち上がり、2000年から劇場の運営も担うことになったNPO法人ふらの演劇工房に対し、運営を活発に行うためのノウハウと資金面でサポートをするために実施した。舞台塾では通常と違った特別な事業展開をしているわけではない。

④ 行政＋創造団体

		アーティスト育成のための事業	一般市民向けの事業	
			講師：地域	講師：外部アーティスト
端野町 (オホーツク)	劇団 「ねぎぼうず」	「ザ・ニューズペーパー」 ワークショップ (地元ネタ探し、劇団と)公演		演劇ワークショップ パントマイムワーク ショップ
北見市 (オホーツク)	劇団 「河童」		市民演劇	高校生演劇ワークショップ 和太鼓ワークショップ 講演
室蘭市(西胆振)	太鼓連盟	太鼓コンテスト、演奏会		招聘公演、講演 高校生演劇ワークショップ

端野町では青年団から独立したばかりの劇団と一般市民が参加するワークショップ、北見市では市民が演劇創造を体験するための市民演劇で劇団員が演出・脚本を担当した。室蘭は盛んだった太鼓の団体を活用した。これまでの活動を活かし、一般市民が芸術を体験するための事業になった。

⑤ 行政＋マネジメント団体

		アーティスト育成のための事業	一般市民向けの事業	
			講師：地域	講師：外部アーティスト
北広島市	ホール運営委員会	コーラスフェスティバル (地元団体、中学合唱部) 市民劇団立ち上げ公演		子ども演劇教室、 講演
音更町(十勝)	音更町文化事業協会	CACCO (Community Art Creative Center in Otofuke) シアターコース(創作)、 アウトリーチ		ドラマワークショップ 学校でのワークショップ 町民創作劇
幕別町(十勝)	まっくぎまっく研究所			演劇ワークショップ、 公演
伊達市(西胆振)	伊達メセナ協会	吹奏楽クリニック(中学生) どきコン(アマチュアバンド 演奏会)		招聘公演 ベートーベン第九 150人大合唱

北広島市、音更町は、舞台塾をきっかけとして創造型の新しい事業を定着させようとしている。幕別町、伊達市はマネジメント団体が以前から行っていた事業を舞台塾として位置づけ、今後の自主事業運営につなげようとしている。地域と外部のアーティストとの関係が以前からあり、続けようとしている。

⑥ 行政+創造団体（アーティスト）+マネジメント団体

		アーティスト育成 のための事業	一般市民向けの事業	
			講師：地域のアーティスト	講師：外部アーティスト
上川地域	ホール企画委員会 旭川演劇協議会	演劇祭	「熱闘三分間劇場」（三分間の脚本を一般公募，上演→講師の講評）	市民演劇公演 演劇ワークショップ
帯広市 （十勝）	帯広市文化スポーツ振興財団 市民オペラの会， 劇団など	演劇・演出ワークショップ，オペラワークショップ 高校生のための演劇ゼミナール		講演 舞台技術講習 長唄ワークショップ 能楽ゼミナール
函館市	函館市文化スポーツ振興財団 劇団	演劇フェスティバル	舞台セミナー（通年の演劇講習） バックステージツアー（舞台技術講習）	講演 招聘講演

上川は旭川演劇協議会の活動と「熱闘三分間劇場」，函館では「函館舞台塾」として上記の事業を舞台塾をきっかけに始め，道の事業が終わっても独自に継続しており，市民参加型活動に地域のアーティストを活用している。帯広では，質の高さを目指す劇団活動や市民オペラの創作と鑑賞，劇団員によって組織された市民演劇などが行われており，それらの団体が企画に参加し，育成するための事業を行っている。

最初に提示された公演やワークショップを形式的に取り入れる事業から，地域に合った継続的な創造型事業の展開に向かう学習過程が踏まれている。実行委員会における行政と市民との協同，創造する団体とマネジメント団体との協同，文化財団や外部から招聘したアーティストのサポートがそれぞれの段階においてアートマネジメントを学習する契機となっていると考えられる。そして，創造団体をネットワーク化しレベルアップを目指す取り組みや，継続・定着の可能性を持った市民参加型活動も生まれている。

そこで，従来から市民オペラや演劇などの創造団体と市民参加型演劇の活動があり，それらを把握していたために舞台塾の事業に活用できた帯広市が，どのようにしてそのような土台を持ち得たかを明らかにしたい。

3. 帯広市における舞台芸術活動の構造

帯広の舞台塾では，市教委生涯学習部文化課（以下「文化課」）が十勝圏地域大会の全体事業，帯広市民文化ホールの運営を担当する「財団法人帯広市文化スポーツ振興財団（以下「財団」）」が帯広の事業の全体的な企画を立て，更に市内の文化団体との協同で事業を行った¹⁰。事業の内容と企画に携わった団体を以下に示す。

文化課が企画した十勝地域大会全体事業

年度	事業名	内容	関わった団体
1999年	オープニング記念講演会，討論会		
2000年	高校生のための演劇ゼミナール	北海道演劇財団から講師	高文連でもともとやっていた
	高校生のための演劇ゼミナール 能楽ゼミナール	講師：西田豊子	高文連 狂言鑑賞サークル
2001年	高文連十勝支部演劇ゼミナール	講師：西田豊子	高文連
	狂言ワークショップ		狂言鑑賞サークル

財団が企画した帯広実行委員会事業

年度	事業名	内容	関わった団体
1999年	舞台技術講習会〔初級〕	照明・音響・舞台美術の基礎 実技講習・模擬公演 北海道文化財団から講師	元は高文連の演劇部を対象にしたホールの実業
	バレエシアター及び公開リハーサル 劇団「一跡二跳」公演 講演会, ワークショップ	小林紀子バレエシアター公演・公開リハーサル 公演, 講演会 大人対象のワークショップ	十勝管内のバレエ団体 十勝おやこ劇場協議会
2000年	舞台技術講習会〔中級〕	短い脚本に基づく芝居を舞台化	高文連
	「オペラ入門」ワークショップ	8ヶ月間練習, 最後にミニ公演	市民オペラの会
	演出ワークショップ	台本をもとに演出をシュミレーション	
2001年	演劇ワークショップ	劇団「一跡二跳」から講師 児童劇団, 中高生など参加	十勝おやこ劇場協議会
	舞台技術講習会〔上級〕	札幌のミュージカル団体舞台 仕込みと公演	高文連
	長唄ワークショップ	家元による講義, 演奏, 実技講習	
	演出ワークショップ	プロの劇作家による道東小劇 場演劇祭の講評	道東小劇場演劇祭実行委員会
	オペラワークショップ	舞台美術講習, 演出に関する講演	市民オペラの会
	演劇ワークショップ	劇団「一跡二跳」 児童劇団・中高生	十勝おやこ劇場協議会

帯広市の舞台塾の実業は、従来行っていた市民オペラや市民演劇のための技術向上とプロデュース力向上を目的としたものである。市民オペラの創造には母体となった「帯広市民劇場」、市民演劇の創造には市内の劇団活動の積み重ねが背景となっている。これらの展開の歴史を概観し、帯広市の舞台芸術活動の構造を明らかにする。

(1) 市民オペラの創造と「帯広市民劇場」¹⁾

「帯広市民劇場」は、1963年に開館した帯広市民会館の運営を活発に行うためにできた組織である。市の文化課が事務局を担当し、「演じる人と鑑賞する人」が運営委員会に入り、中央からの招聘事業と、発表の場提供などの形で地元の文化団体の育成事業を行った。

〈帯広市民劇場の概要〉

[目的]

帯広市の芸術文化推進を図り、演ずるものとこれを鑑賞する市民との交流の広場を創り、市内芸術文化団体の育成発展をめざします。

[帯広市民劇場運営委員会]

特別顧問(市長, 教育長)・顧問(歴代委員長・副委員長)委員の選定等

委員長, 副委員長, 監査, 委員(演じる人と鑑賞する人合わせて30名)事業の企画, 運営事務局(帯広市教育委員会社会教育部文化課)

[事業]

一般公演…地元文化団体（個人）で主管，企画実施する舞台・展示公演（年間 20 本）

会場費を免除，入場料収入の 1 割を市民劇場に納める

特別公演…文化団体・個人の育成のため，市民劇場運営委員会で企画・実施する公演

新人演奏会，全十勝職場・サークル写真展，全十勝書道作品展，北の構図展

その他…文化団体及び関係者新年交礼会，帯広市民劇場賞の贈呈，海外芸術鑑賞ツアー

招聘公演（1992 年まで）

1985 年には道立美術館誘致のための展覧会『ミレーとバルビゾンの画家たち』を十勝一円を巻き込んだ運動として発展させ，1986 年には運営委員会の有志で帯広初の市民ミュージカル『青い鳥』を公演するなど様々な活動を展開した。1987 年には市民に本物のオーケストラを聴かせることを目的とした「帯広交響楽団」を創設した。

1984 年に帯広市文化スポーツ振興財団ができ，財団や民間企業も招聘事業を行うようになったことから，市民劇場の招聘事業の役割は終わったという合意のもと，1993 年からは地元の団体の育成に的を絞って活動していくことになった。そして 1997 年には市民の手による芸術性の高い市民オペラ¹³を目指して取り組むことになり，市民全体での盛り上がりをつくり，2 回公演で市民文化ホールが満員になる延べ 3,000 人を動員した。以後数年に 1 回の公演を目指し，ソリストや合唱団で「市民オペラの会」を発足した。

〈帯広市民オペラの概要〉

[組織]

帯広市民オペラの会…市教委，市民劇場，合唱連盟，吹奏楽連盟，交響楽団協会，財団
カルメンを成功させる会（募金活動，広報宣伝など）

キャスト ソリスト…声楽を専門にする人等 オーディション実施

合唱団，児童合唱団，バレエ団…市内の団体及びオーディション

帯広交響楽団

スタッフ 演出，演出助手，舞台監督，舞台装置プランナー（東京や札幌の人に依頼）

大道具，小道具，衣裳，アクセサリ，メイク，美術，舞台装置，照明，効果・音響

（市内のサークル，公募）

[経緯]

1993 年 10 月 帯広市民劇場運営委員会の中で市民オペラの話題が話される

1994 年 各地のオペラを見学，公演の可能性について調査

- 1995年5月 帯広市民オペラの会設立
 7月 ソリスト・合唱団オーディション、練習開始
- 1997年1月 ニューイヤーオペラコンサート
 2月 スタッフ説明会
 4月 カルメンを成功させる会 設立総会
 5月 作業場開き（舞台装置制作）
 11月21日「カルメン」公開練習
 11月22日・24日「カルメン」公演
 11月 帯広市民オペラ「カルメン」写真展
- 1998年4月 新帯広市民オペラの会設立（ソリスト，合唱団）次回のオペラ上演に向けて練習を続ける
- 2001年6月 帯広市民オペラ「魔笛」公演実行委員会設立総会
- 2002年 帯広市民オペラ「魔笛」上演予定

(2) 市民参加型公演を組織する演劇活動

現在の帯広市の演劇活動に携わる人は1960年代に高校の演劇部で活動しており、「扉」「ほうき座」など劇団を作って活躍してきた。劇団「ほうき座」は刑務所や少年院の慰問公演と大きなホールでの一般公演を行っており、33年間にわたって質の高い芝居作りに取り組んでいる。また、片寄晴則さんが主宰する劇団「演研」はそのような大きな規模の活動とは違った、小劇場の空間にこだわった芝居作りで高い評価を得ている。

また、劇団合同演劇から市民演劇へ発展する活動が行われている。

作 品	き っ かけ	参 加 者	結 果
①1972年 「赤い鳥の居る風景」 (市内の劇団の合同公演)	開拓90年記念の事業をやる文化団体を行政が探していた	高校で顔見知りだった、演劇をやりたい若い仲間が集まる	帯広のアマチュア演劇の裾野が広がり、交流が生まれた
②1982年 「十勝野」(同上)	十勝の史に関する小説を舞台化したい	もう一度合同演劇を人数・団体が増えていた	
③1995年 「銀河鉄道の恋人たち」 (市民参加ミュージカル)	ミュージカルの曲ができたので、舞台化したい	作品をつくるにあたって、合唱団・スタッフなど市民参加必要35名程度参加	ぶつかりあいを経て一つの作品をつくるために団結、感動のうちに成功
④2002年 「十勝伝説」 (市民参加演劇)	十勝の演劇の裾野を広げるために計画	市民参加キャスト100名スタッフ150名予定 ¹³	

劇団「ほうき座」の窪田稔さんは、劇団の他これらの企画にも携わり、出演している。これらを演出した石田昌志さんが指導する帯広児童劇団は、市内の小中学生が参加して帯広市児童会館を拠点に継続的に活動している。本格的な芝居作りを通した子どもの成長のきっかけになっている。

帯広市民劇場では、行政と市民、創造する人と鑑賞する人の協同により、招聘公演と地域のサークルの支援を行う中で、「市民が鑑賞するための質の高い芸術を、市民の手によって創造する」という論理を持った。演劇活動では、劇団が「地域のアーティスト」として自覚的に地域の人に鑑賞されるための活動、合同演劇や市民演劇を市民主体で展開している。行政と財団はそれらを把握していたため、舞台塾の事業を通してこれらの活動がより発展するために、外部の専門家の力を借りて学習する機会を提供することができた。

次に、劇団員が「地域のアーティスト」として活動し、市民によってコミュニティアートの実践が積み重ねられている演劇活動に焦点を当てる。

4. 演劇活動における「地域のアーティスト」の形成条件

帯広の演劇の中心的な役割を果たす石田昌志さん、窪田稔さん、片寄晴則さんのこれまでの活動歴から、「地域のアーティスト」形成の条件を考察する¹⁴。

石田昌志さんは、高校の部活で演劇を始め、社会人になって高校の仲間と劇団「扉」を作った。開拓90年合同公演を企画し、地域に演劇の裾野が広がることを経験した。

「プロではないので、帯広を拠点に劇団を作り、生活の中で芝居を作っているという感覚。若かったので、演劇の裾野を広げようなどとは考えていなかった」

「この頃帯広の社会人の演劇は団体数も少なく停滞していたが、合同公演をやってみると団体数も増え、劇団に入った人も何人かいた。地元の演劇の裾野が広がったと思った。」

劇団が活動できなくなってからは、行政から持ち掛けられた児童劇団の演出、他の劇団の人や作曲に取り組む人と協力して行った市民ミュージカル演出の経験を経て、地域の芸術活動の担い手を育てる必要性を意識した。

「知らなかった人が参加することに意義を感じており、市民ミュージカルをきっかけに底辺が広がればいいと思った。この公演の前後から地域の文化活動を意識していた。この頃各地に文化ホールができ始めたが、いくら箱ができて技術者や演劇をやれる人がいなくては駄目だと思った。開基90年の時のように、この公演が十勝の文化活動の起爆剤になるだろうと思った」

そして市民演劇『十勝伝説』を組織し、参加者が人のつながりの大切さを再発見して欲しい、演劇や舞台技術に興味を持つ人が増えて欲しいという願いのもと演出に取り組んでいる。

「人と人とのつながりの中で新しいものを発見できれば良いかな。色んな人と知り合い、世代の違

う人とも互いに助けあう。作品自体が家族の絆を描いたものなので、参加した人には考えてもらいたい。作品から学ぶことは、アマチュアなのでそういうことも必要だと思う。人のつながりということは、今までの別の作品でも考え方としては持っていた。それは大きな作品を作っていく中で、市民参加はそうあるべきだとわかってきた。自分も芝居を通しての人のつながりに恵まれている。芝居をやってこれたのは人のつながりで助けられてきたから。長く芝居をやっていて見えてきた」

窪田稔さんは、中学・高校の演劇部で活動していた。その後現在のリーダーとともに作った劇団「ほうき座」の少年院、刑務所慰問公演がベースになり、大きなホールでの一般公演でも多くの人に感動を与える演劇を目指す役者になった。

「慰問講演では悲しい・楽しいなど両極端なものが受けがよく、考えさせられるものは受けない。慰問講演がベースになって、一般講演でも誰でも感動できるわかりやすい芝居を心がけている。」

「刑務所の人をよく笑うし乗ってくるが、少年院は無反応だった。感想を書いてもらうと、『笑いたかったけど恥ずかしい、いじめられるから笑えなかった』と返ってくる。少年院の笑わない、心を閉ざしている子達に対して、それをぶち破るための挑戦をしてきた。中身や作品の選択をタイムリーにするなど、何を求めているかを考え、だんだん笑いが出るようになってきた」

プロとして演劇をやりたいと考えたこともあったが、プロの人との会話の中で、本当に自分たちがやりたい、観客に見せたいと思う作品を作れる地元のアマチュア活動に前向きな意味を見出すようになった。

「プロに『君たちは贅沢な芝居作りをしている』と言われた。『プロは何十人もの人を使い、入場料何千円もって何ヶ月も公演しないとペイしない、それを君たちはたったの2回の公演のためにこの作品をやるのか』と。作りたいものを作り、その結果見てもらいたいという気持ちで、採算を考えなくてもいい。赤字にならなきゃ良いので、入場料も500円とか1000円で良い。そういう意味では自由。市民の皆さんに見て欲しいという発想で、原点は自分がやりたいということ」

「プロの人との会話で、『窪田さんが羨ましい』と言われる。『好きな作品を選んで、ついてくる人間が1回の公演に何十人もいる、君くらいの立場になれば好きな役も選べるでしょう』と。彼らは一つ間違えればはねられるし、与えられたものに文句は言えない。負けなだけの努力もしなければならぬ。それで、僕はこの贅沢な芝居作りをしたいと思った」

合同演劇や市民参加型公演にも出演している。自分の存在感を見出せるのは演劇であり、人生のすべてが演劇を通して流れていると考えている。

「33年間、中学高校を入れると38年の演劇人生。全てが演劇を通して流れていった。演劇では僕の存在感が常にある。全てが存在感を求めて動いていると思っている。若者がキレルのも存在感が希薄になっているからだと思っている」

片寄晴則さんは親が興味を持っていたため、幼少の頃から舞台に親しんでいた。質の高い芝居を求めて劇団を渡り歩いた経験もあるが、同じ志を持つ仲間と劇団「演研」を立ち上げた。

「稽古が週2回あって、肉体訓練に始まって発声、エチュードをやって反省をやって、1回4～5時間。反省の時に次に向けての課題を出す。社会とちゃんと関わるために世の中の事件、問題に関心を持ち、新聞や本を読めとか、脚本もいろんなものを読めとか、生活を洗い直すことをした。睡眠など家で必要な時間が8時間、仕事が8時間、それ以外の8時間は全部芝居に下さいと。それくらい出来なきゃ駄目だよ。」

公務員の仕事をしていたが、転勤をきっかけに帯広の仲間と芝居をすることが自分にとってなくてはならないことだと再確認し、帯広に戻って喫茶店を経営している。

「半分は芝居を辞めなければいけないという覚悟でいた。そのとき、たまたまNHK教育TVの『若い広場』という番組があって、テント芝居をやっている劇団のルポをやっていた。それを女房と見て、僕らどうしようかと2人でしゃべって、気づいたら朝になってたんだけど、この先転勤しても、階級が上がって小さい所には行かないから釧路・旭川・札幌なら劇団があるので芝居をやることは可能だと思った。でも、高校出て出来なくて、あかねの会で拾ってもらって、あかねの会も捨てて自分で集団をやりたいように作った。今更よそ行って、30過ぎててそこのカラーに染まるのもつらい。それに、仲間と一緒に芝居をやりたい、仲間が大切という気持ちが強かった」「芝居が好きだといってもどこまで好きか、確かめる機会がなかった。離れてみて初めて、芝居がない生活は考えられないと思った。『やめても仕事があるし』とか、いいかげんな気持ちで何かに頼っていないで、自分がちゃんと芝居をやるということを再確認した」

自分の店を稽古場・公演の場として、合同演劇などの規模の大きな芝居とは異なる小劇場の流れを作り、地域の観客の支えのもと質の高い芝居づくりを続け、一定の評価を得ている。

「お客さんの息遣いが伝わり、お客さんの反応で芝居が変わる。小さな所で続けているから10年くらい見続けてくれる人もかなりいて、目が肥えてくるというか、他の地域から公演をしにやってくる劇団の人は帯広のお客さんは素晴らしい、反応がダイレクトでやりやすいと言う。これは僕らの誇り。ありがたいことに、お客さんは僕たちは演研の芝居に育てられた、芝居の見方を教わったといってくれる。1本の芝居で、一般の人はこういう風に見るんだ、上質な客の反応でこういう芝居なんだ、というのを本番を通じてお客さんに教えられることも随分ある。小劇場で始めてお客さんの反応で芝居が変わるといふのを肌でわかったときから、お客さんと一緒に芝居を作っていくということを感じるようになった」

活動を経て東京や札幌でなくても芸術性の高い作品は作れることに気づいた。釧路や北見の劇団との交流を持ち、道東地域で作っている芝居を発信しようという意味を込めて道東小劇場演劇祭を開催した。

「演劇祭は札幌の人も見に来ていて、『札幌でやって下さい、道東で埋もれているのはもったいないですよ』と言われたけど、札幌はステータスだとも思っていないし、演劇祭の意味はそういうことじゃない。1ヶ所では駄目でも、道東小劇場ネットワークを作って、道東から広げていくムーブ

メントを起こす。それをきちんと見てもらったら絶対こっちの方が（大都市より）いいものやっているとこのもあるわけだから、ということもあって今回の演劇祭になった」

共通する条件として、芸術創作に対する強い意欲のもとに努力をしていることが挙げられる。それに、高校の演劇部の仲間を始め、劇団員や市民ミュージカルを一緒につくる人など、周りに芸術をつくる仲間がいる。3人もお互いに違う高校で同じ時期に活動していたことがきっかけで交流を持っている。また、3人とも妻も演劇をともに作っていたことがあり、家族が理解・協力してきたから自分が活動を続けられたと考えている。帯広での活動に積極的に向き合う契機としては、石田さんは児童劇団や市民ミュージカルを通して地域の担い手を育てる必要性を感じた。窪田さんはプロの人とのやりとりの中から、アマチュアでやっていくことを前向きに捉えた。片寄さんは転勤をきっかけに、芝居と仲間が自分にとって不可欠であることを再確認した。

また、石田さんは一般公募の参加者との活動から市民参加型演劇の意義を見出す。窪田さんは少年院の慰問や一般公演、片寄さんは観客の反応が伝わる小劇場での芝居を通して、観客との身近で持続的な関係をベースに見る人の心に訴える演劇をつくっている。3人は地域の参加者や鑑賞者との顔の見えるやりとりの中で活動を展開している。行政は合同公演や児童劇団でのきっかけづくりや北海道舞台塾での技術的な支援、道東小劇場演劇祭などの形で協力しており、ここでの行政の支援は単に創る側と観る側を結ぶのではなく、創造事業を組み立てる段階からの支援である。

3人はこのように、自分たちの才能と努力、仲間や他の劇団、家族の存在などの条件に支えられ帯広での活動を肯定的に捉え、地域の鑑賞者との顔の見える関係や行政からの協力により、「地域のアーティスト」として活躍している。

5. 市民参加型創造活動の展開過程

帯広市の市民参加型活動では、石田昌志さんが帯広児童劇団の演出、一般公募の創作活動など継続的・発展的に創作を行っている。そして、ともにリーダー層を担った人たちのそれまでの経験や、実践の中で築いた独自のやり方も反映され、帯広のコミュニティアートにおける固有の価値を作り出した過程について述べる。

(1) 帯広児童劇団¹⁵

1988年頃、劇団員からアマチュア演劇停滞の対策を要請された文化課が、まずは子どもに興味を持ってもらおうと帯広児童会館¹⁶のクラブ活動の一つに演劇を加えた。本格的な稽古をして公演を実現し、1990年には「帯広児童劇団」として独立した。

小学4年から中学2年まで入団でき¹⁷、団員は全員舞台に立つ。参加可能な卒業生は、練習の指

導や公演の裏方を務める。演出は石田昌志さん、作曲・振り付けは地元で音楽、ダンスに取り組む人が担当する。団員の親は送迎、長時間の練習時の食事づくり、公演のパンフレットづくり及び広告集め、衣装、メイクなどを担当している。帯広市民文化ホールの小ホール（560席）2回公演で立ち見が出るほどで、何年も見続ける観客もいる。1998年・1999年には文部省委嘱『子どもの「心の教育」全国アクションプラン』に指定された。

経験年数1～3年程度の団員のインタビュー（小学生12人中学生4人）

入団のきっかけ	楽しそうといううわさ/OCTV（地元の有線）でやっていた/公演をみて/新聞で見て先生とおじいちゃんが知り合っていた/兄・姉が入っていたから（6人） 歌が思いっきり歌えるから/文化系だから。
入ってみて	難しい/1年目は難しかったが、2年目は頑張った/踊りを習いに行った。厳しかった。辞めたいと思ったけど公演をやったよかったと思える/大変だけど公演をやったら楽しい（大変な人、と聞くと全員の手が挙がる。楽しい人、と聞いても全員の手が挙がり、両手を挙げたり、立ったり、足を挙げる子も）
親は何と言ったか	大変だ、やめろ/衣装を作るのが大変/父はどうだった？と聞かすが、母は大変だという。家が遠くて来るのに車で30分かかるので、来年やめるか、と言われたが、（先輩から）やめないとFAXが来た/やめたくない？と聞かれたが、楽しいからやめたくない。
良かったこと	初めて踊って、（見に来た人に）うまいと言われた/友達ができた。 今年入って、休んだときに困って泣きそうになったけど間違えないでできた。 公演の次の日に学校の靴箱に手紙がたくさん入っていた。 最初は友達もできなくて、お姉ちゃんにも「こっち来ないで」と言われたけど友達ができた。
辛いこと	先輩が泣いたときは、自分たちのせいだと思うので辛い/去年踊りが遅くて先生に幕が上げられないと言われて/帰ってからの姉の指導/踊りが大変/みんなの前で先生に怒られた/失敗したとき/友達にチケットを売ろうとして、（去年の『カレーライス物語』公演の時）「カレー食べれるの？」と聞かれて、「カレー食べれないなら行かない」と言われた/チケットが高いと言われ、影で「どうせ大したことないのに」といわれたとき/先輩に踊りを見てもらって、「おうちで練習してきた？」と言われた/（『カレーライス物語』でスパイスの役をやって）学校で「スパイス」、「たねこ」と渾名をつけられた。
公演の意気込み	完璧にして、みんなを泣かせる/力を合わせて/先生に20分くらい涙を入れられてやばい所もあるけど、あと少ししかない時間を有効に使って、中3の人もやめるからちゃんとしたステージにしたい
誰にチケットを渡したか	全校集会で言ったら校長先生に呼ばれて、家族で見に行くから10枚欲しいと言われて、1年生にもきかれた/仲のいい友達、クラスメイト/隣近所/来てくれる友達、おばあちゃん朝の会で言った/学童保育の友達

経験年数3～7年の団員のインタビュー（中学生6人）

	①7年目、中3	②6年目、中3
入ったきっかけ	姉がいたから。	前の年の公演を見て。姉の友達の妹が入っていたので見に行った。
入ってみて	人見知りでなかなか友達ができなかったが、合宿の時にできた。	見ているだけだと学芸会のような感覚だったが、雰囲気や練習が本格的だった。
親は何と言ったか	入ったときには自己紹介もできなかったのに、舞台上で演技しているのを見て感動した。	たくさん練習があって、送り迎えも大変だと言ったが、通し稽古を見て頑張っていることをわかってくれた。

良かったこと	友達ができて、自分も変わった。明るくなった。	演劇の基礎だけではなく、人間として大切なことを教わった。入る前の自分と内面が変わった。
辛いこと	入ったときは練習が9時までであり、前は8時に寝ていたので睡眠が足りず疲れた。	小4で入ったが、それまでより自由になる時間が減った。年上の人が多い。踊りが鈍くて追いつくのが大変だった。
公演の意気込み	最後なので自分の力を出しきって、今までで最高の舞台にしたい。	自分だけでなく、23人全員が終わった後に一緒にやってよかったと思えるように、悔いの残らない舞台にしたい。
誰にどのような気持ちでチケットを渡したか	自分が変わったこと、普通に学校に行っているにもかかわらず、友達や幼なじみに見せたい。	学校にいるときの自分と違うところを見せたい。6年経った今、表現力や、色んな人から色んなことを学んでいること、学年の違う人とやるのはいいことだと皆にわかってもらいたい。友達も自分と同じ中3なので、友達の妹などがみて自分もこうなりたいと思って入って欲しい。

	③6年目、中3	④5年目、中2	⑤3年目、中2	⑥5年目、中2
入ったきっかけ	市の広報を見て。	いとこが入っていたから。	兄が入っていた。	広報で見て。
入ってみて	学校とは違う友達ができ、一緒に頑張っている。	大きな人がいっぱいいる。	できるのかな、と思った。	練習時間が多くて大変。
親は何と言ったか	何も言わなかった。たまに「やめさせるよ」と言われる。	やりたいならやらないさい、と言う。親も演劇をやっていたので、練習につきあってくれる。	好きなことをたくさんやりなさい、と言う。	辛いことはあるけど頑張りなさい、と言う。
良かったこと	色んなことを教えてもらった。自分に勝つこと。	本番が終わったときの達成感。	公演が終わったときに皆に誉められる。発表力がついた。	本番が終わった後。
辛いこと	今がづらい。	学校で眠い。本番が近付くと先生も厳しくなるのでづらい。	家が（練習場所から）遠い。寝不足で、次の日が大変。	本番が近いと、学校にぎりぎりで走って行く。
公演の意気込み	演劇を通して学んだことも一緒に、お客さんに伝わらいたいと思う。	ベストを尽くします。	去年よりうまくいったと言われたい。	頑張りたい。
誰にどのような気持ちでチケットを渡したか	友達や買ってくれる人に。（気持ちは前の答えと同じ）	友達や学校の先生に。見に来て下さい。	学校で。ドキドキ。	知り合いに。緊張する。

母親5名のインタビュー

きっかけ	公演を見て/知人の紹介/子ども同士で誘って/広報を見て子どもが演劇好きだから等知人からの引きずりパターンが多い/どんな世界かわからず入った。知っていた人は(大変さを知っている)で子どもがやりたがっても入らない。
親自身も活動してみたい	一度入ったらはまってしまう/ほとんどの人が仕事をしているので大変/衣装を泣きながら作る。昨年も、前日に衣装に毛糸で飾りをつけることになった/最後の最後までよりいいものをつくるためにやっている/来年はやめたいと思いつながらやるが、終わったらやってよかったと思う/学校や少年団とは違う。縦のつながり、親同士のつながりがある/子どもが楽しくやっているから親も頑張る。
子どもの活動の様子	入った年は体力的にも大変だが、子どもは点滴を打ってでも来る/栄養ドリンクを飲ませている/練習に来れば元気になる/どうしてここまでやるのか不思議だが、何か魅力があるのだと思う/先生との信頼関係があり、怒鳴られても納得している/OB・OGも根気強く、できない子につきっきりで指導している。
子どもの成長	子どもは時間の使い方がうまくなった。先生が「皆に一日24時間与えられている」と日頃から指導している/子どもは成長している。こんなこともできるんだ、と思う。ここに入っていなければ子ども子どもでいたかも。
学校生活への影響	大変でも学校も意地でも行く/学校の先生の理解もそれなりにある。公演を見に来てくれるし、がんばったことを評価してくれる。子どもの顔が輝いていると言っていた/子どもが学校で悩みを抱えていたが、学校ではない集団は楽で、上のお姉さんたちに誉められるのが嬉しくて、元気に学校にも通えるようになった。表情が前と全然違う。つらくても休まない。小さな頃から芝居の好きな子だったので励みになっているよう。このことは入ったときに他のお母さんたちにも話したら、皆が気にかけてくれた。
公演後	衣装を直前まで作り直して大変だったが、終わってしまうと寂しい。また来年もやりたいと思う。子どものためなら親は頑張れる。

団員は演技、歌や踊りを身につけているが、同時に演劇を通した努力や学校とは違う人間関係による成長、良いものをつくりたい・見てもらいたいという芸術的表現要求、自分の成長した姿を見てもらいたいという自己表現要求がみられる。親は自分もスタッフとして参加し、親同士の集団形成、自分が努力することによる育ちとともに、演劇を通して成長する自分の子どもの新しい発見がある。団員・母親からの働きかけによって、団員の友達や教師なども公演に足を運び、作品に対する感動、小中学生がここまでやっているという感動を得ている。継続的に行われている芸術創作活動であると同時に、観客を含めて地域の中で子どもの成長というテーマを見つめる実践になっているといえる。

(2) 市民参加型演劇

1995年に行った市民参加ミュージカル『銀河鉄道の恋人たち』¹⁸は、劇作家・大橋喜一作の脚本に地元の作曲家が曲をつけ、公演を実現したいと熱望しており、石田さんを始め彼の友人が実行委員会を編成し、音更町文化事業協会10周年記念事業に名乗りをあげ実施した。役者、合唱団、スタッフなど多くの人が必要だったため、十勝全体から公募した。参加者の葛藤を乗り越えて連帯感が生まれ、作品のみならず作る過程そのものが感動を呼んだ。

十勝の開拓の歴史を題材にした市民演劇『十勝伝説』¹⁹は、十勝の演劇の裾野を広げるため、市民参加型活動・コミュニティアートを創造することが目的で始まった。以下は、リーダーとしての役割を果たす演出、舞台監督、制作部長のインタビューである。

		石田昌志さん（演出）
役 割	演技指導	
以 前		劇団「扉」、開拓90年・100年合同公演、音更町での市民ミュージカル 90周年の時は演劇をやりたい仲間が集まって作った結果裾野が広がったが、今回は裾野を広げることがテーマであり、音更でミュージカルをやった時の考えがベースになっている
き っ かけ		東京の人から企画が持ち込まれた。十勝の演劇の裾野を広げるためにやろうと思った。
参 加 時 期 待 感		次の世代に大きなものを作る人、演出や舞台技術を担える人を作品を通して育て、帯広・十勝の演劇が盛んになればと考えている。
実 際 取 組 ん で		これまででは時間がなかったが、今回は組織図を作ってシビアにやった。昔教えていた子と一緒にやっていた人が参加していて、種をまいた芽が出てきた。一般の人は芝居をつくる辛さを知らないが、やりたい人の意志を尊重しながらどう役者にしていくかが難しい。結果でなく、過程を大事に一生懸命やるのが大切。
参 加 者 へ の 働 き かけ		役者にはワークショップを行い、芝居をやっていた人とそうでないひとの差を埋めようとしている。演技の技術、制作・舞台に関しても、参加者にノウハウを伝えようとしている。郷土史について地元の人もこういうことがない限り知らないことが多いので、管内を回って歩くなど参加者以外の人も巻き込んだ学習機会を設けた。
公 演 へ の 目 標		芝居を作るプロセスの中では、人と人のつながりをどうやって作るかを考えながらやっている。初めての人もいるが、そういう人がある程度できたら当初の目的は達成だと考えている。
観 客 へ の 意 識		一般の人に一人でも多く見てもらいたい。そのために機関紙を作らせ、各機関に置いている。あとは、別のジャンルでやっている仲間とのつきあいで、関係団体におろしてもらう。

		A (制作部長)
役 割		お客さんに案内するため、演出や舞台の進捗をチェック。 ホールが満席になるように、地域の人に案内し広く浸透できるような仕組みを作る。
以 前		音響照明舞台総合プロデュース、コンサート企画運営、ホール委託業務を行う会社を経営「わらび座」道東公演プロモーター
き っ かけ		1年前にわらび座のワークショップをやって、石田さんに協力してもらったので今回声がかかった。演劇作りの経験はなかったが、わらび座公演の経験から、いかにお客さんに来てもらうか、地域の人に広がりやをどう作るか、対外的な対策は出来ると思った。
当 初 期 待		歴史を勉強し、置き忘れていたかもしれない先人の苦勞を伝えるための演劇かと思っていた。
実 際 取 り 組 ん で		人間は協同して生きているということが、演劇づくりに象徴的に存在している。市民参加は人と人の出会いの場だと自分なりに位置づけをした。未経験者が楽しく活動していけるように、グレードを求めるんじゃなくて違う所に意味を持たせる。演劇づくりそのものがドラマなので、本公演の出来栄ではなく活動に取り組むプロセスを市民にオープンにしていく。スタッフのチーフは何となく決めたが、リーダーの力量がないとあつれきが生じる。そういう時は影のリーダーが出て、皆が責任を持ってやれるようになってきた。
参加者への働きかけ		経験者と未経験者のギャップからあつれき生まれた。基本的には未経験者をベースに、一人一人が輝く場になるよう気をつける。問題が起きたらそれを考えて対処。互いにキャラクターが見えてくると理解しあえるので、だんだん気にならなくなってきた。 チケットを責任もって売するために、制作の立場として言うべき所は言う。自分で手を挙げて来た人たちだからちゃんといくはず。そのエネルギーを信じる。 歴史を学ぶために、十勝の歴史探索ツアーや講演会を開いた。新しい人を巻き込んでいきたいので、一般市民対象。
公 演 へ の 目 標		今回はキャスト志望がほとんど。スタッフの人材を発掘、育成したい。 地域の暮らしを豊かにするために主体的に動くリーダーを育てたい。ここで学んだリーダーシップをいろいろなジャンルで発揮するという意味では、通過点。 自分たちで主体的にこなすエネルギー、草魂が、文化を自分のものにする。市民からの支援がないと活動が保証されないの、そのためにもプロセスを地域の人にさらしていく。
観 客 へ の 意 識		お客も含めての参加者。プロセスを見て欲しい。 一人でも多くの人に案内したくなる活動にしないと。頑張ってきたことを友人・知人に見に来てくれと言えるようにするには、一心不乱に取り組むこと。十勝伝説はそういう活動になっている。みんなが意識が高まった結果、お客さんに良かったと言われるものになっていく。

		B (舞台監督)
役 割		キャスト・スタッフの環境づくり。スタッフの統括。本番の舞台仕込みの指揮。
以 前		わらび座の公演の実行委員会で関わって、プロの舞台裏は見ていた。 「正調ソーラン」のチームを作っている。伝統的なソーラン節から古い時代に生きた人の想いを学び、今の時代に足りないものを感じて成長するという取り組み。
き っ かけ		わらび座の関係で制作部長や演出とは顔なじみだった。 舞台の知識を持っている若い人はいるが、いろいろな年齢の人を100人まとめる舞台監督はある程度の年齢の人がいいということだったと思う。
当 初 期 待 感		この作品は、希望を持って十勝に来たらとんでもないことが起こり、絶望もある中で人間の絆が輝いて見えるというのが、正調ソーランでやってきた思いと価値観が近いので、自分のポジションがあると思った。石田さんの人間性もあり、苦勞してもやってみたいと思った。
実 際 取 り 組 ん で		素人なのでどうしようと思ったが、出来ることは人をまとめること。輝いてもらえる環境づくり、舞台工房の整備をし、ステージのことを勉強している。役者さんが輝いてもらうと同時に、スタッフも「俺が拍手をもらっている」と思えるように全体を作る。 メンバーのぶつかり合いもあったが、人との関わり合いの中で変わっていった。最初は「こんなもんでいい」というのがあったが、キャストが必死に練習している所を見ると「これじゃいけない」と自分たちで感じて、勝手にレベルが上がる。

参加者への働きかけ	演出プランを待つのではなく、それぞれのセクションが台本から洗いだしたイメージで作り、演出と戦う。スタッフも稽古を見てイメージを膨らませ、何が必要か気づいてもらう。時間が掛かるが、やりきった自信を持ってもらえる。そういうやり方をするのは、自分から手を挙げて来る人だから、出来る意欲があり、自分で感じていこうと出来るから。 互いに支え合っていることを感じてもらいたい。スタッフ会議を開き、製作工程表を出してもらって、同じ場面の小道具と衣装が合うか等すりあわせをしていく。
公演への標	演出とスクラムを組んですりあわせをする。本当に必要なものを考えられるものは考えて、演出が本番ぎりぎりですべて変えて欲しいと言っても対応できるようにしたい。素人が多いからこそ、参加している人は自分と戦い、各ポジションも戦う。最後に美味しいお酒が飲みたいし、友情を勝ち取って終わって欲しい。一生懸命やらないと勝ち取れない、与えてもらうものじゃなく苦勞して出来るもの。
観客への識	歴史の紹介だけでなく、絶望と希望の戦いの中で生まれた人の絆を見て、素敵だと観てもらえたら。台本にはそれを訴える場面があるので、効果的に助ける舞台プランを作る。役者・スタッフが感じられなかったら、お客さんにも伝わらない。苦勞して質の高いものを作っていけば、自分のやったことを見てもらいたいと思うからチケットも売れる。今戦いきることができれば、そういうことは解決していく。

彼らは、登場人物の気持ちを読み取ることや、演劇創作の過程での人間関係づくりを通して、人と人の絆を感じて欲しいと考えている。また、参加者が十勝の開拓の歴史を学ぶために、歴史講演会や探索ツアー、わらじづくりなどを行っている。そして、それらを舞台上で観客に訴えるために、石田さんは初心者でも妥協しない演出をする。舞台づくりは舞台監督を中心に、指示を出してやってもらうのではなく参加者自身が脚本から読み取ったり、稽古を見て必要なものは何かを考えている。そして、参加者同士が交流できる機会をつくることも考慮に入れている。さらに、制作部長が『十勝伝説』と一般市民をつなぐ役割を果たしている。演劇づくりそのものにドラマがあることに気づき、機関紙の発行²⁰という形で一般市民にそれを開示している。チケットを売りに奔走するのではなく、真剣に取り組めばそれだけ参加者自身が人に見てもらいたいと思うようになる、だから観客は自然に集まるというスタンスである。

次に参加者の意識について、インタビューの結果から述べる。

	C	D
役 割	キャスト（主人公）	キャスト，事務局，メイク
以 前	22～3年前から10年間劇団「扉」にいた。「十勝野」に参加、図書館で資料を集めて勉強した。色々な人が集まると視野が広がる。「銀河鉄道の恋人たち」にも出演して歌に興味を持ち、終わってからすぐ合唱団に入った。	小・中学生時代は児童劇団に所属。高校、短大で演劇をやっていた。
きっかけ	石田さんの誘いで、長いつきあいなので実行委員会の話し合いにも参加した。	役者をやりたかったので、申込書を出した。
参加時の期待感	開拓を題材にした芝居で、先祖に興味を持った。十勝の開拓がどういう風でできたかを子ども・若い人に語り継ぐものとして考えた。	演劇をやりたかった。人見知りをするのでこういう所に出てきて人と話そうと思う。多くの人と話して帰ろうと心がけている。

実際取り組んで	台本が難しく、感情をこめて台詞を言うのが難しい。役が劇の最初から最後で22歳から67歳になる。ここまで変化するのは初めて。アイヌの問題に関する台詞が一つあり、深い意味がある。よく理解しないと表現できない。それぞれ、一つ一つの台詞が課題。	キャストは厳しく、メンバーも減ったこともあり、辞めようかと思った。石田さんが来られないときに、劇団をやっている人が引っ張っていたが、初心者がいる中で厳しかった。活動は楽しい。いろいろな人との出会いから得るものがある。
公演への目標	観客の心に、開拓のつらさ、入植の様子を伝えたい。帯広開拓120周年の記念に残るものが出来れば良いと思う。	二役もらったので、違う人になりきれるように、性格を研究している。まだまだ足りない。
観客への意識	劇中の家族が散らばってそれぞれの分野で活躍していることを主人公が伝えていく。一生懸命頑張って良かったという感動を伝えたい。お年寄り、若者、子どもなど、年齢は上から下まで皆さんに見て欲しい。	両親や友達に見て欲しい。おばあちゃんにも、台本と接点があるので是非見て欲しい。暗いシーンが多いので、笑える所は面白く見えるように演技をしたい。

	E	F
役割	キャスト、大道具	キャスト
以前	劇団「ほうき座」で15年。キャスト、スタッフ両方やっている。「青い鳥」の手伝いがきっかけで入った。「銀河鉄道の恋人たち」にも出演。	劇団「ほうき座」初期から。芝居が好きなので何十年もやっている。「青い鳥」にも参加した。
きっかけ	劇団で出られる人は出るようになった。	(Eさんと同じ)
参加時期期待	アマチュアなのでどこでやっても良いと思った。	参加するので、その中でやっていく。
実際取り組んで	内容が暗い、重いので大変。だから面白い部分が浮き出る。つらいことばかりでは生きていけない、楽しいことも必要ということは、人間だからいつの時代でも同じ。歴史について、時間のある時に資料を見て、雰囲気を知るために下調べした。最初は皆がどんな人かわからないので、子どもが新しい学校に入るみたいに精神的に疲れた。やっと顔と名前がわかってきた。	開拓2・3・4代目の歴史も描いている。最初は1シーンをドラマチックにやると思っていたが、長い歴史を描くので大変。いろいろな人がいて楽しい。芝居を知らない人もいるので大変。感性が必要だが、みんな一生懸命やっていてえらいと思う。みんなが集まるのは大変。先人に対する感謝は、台本を読んで初めて意識した。
公演への目標	役者は台詞がはっきりわかるように。長いので見る人は大変だと思う。テンポ良く楽しく作れたら良いと思う。大道具のほうは、はっきり煮詰まっていない。演劇に興味を持つ人が増えて欲しい。	子どもたちに先人の苦労を伝える。感動を呼ぶ舞台にしたい。冬は寒くて長いので健康に気をつけて。良いものを作りたいという思いはみんな一致していると思う。集団演技をみんな同じレベルでできるようにしたい。
観客への意識		出来による。お粗末だったら人を呼べない。今は不自由なく暮らしているが、開拓は血の出るような苦勞でゼロからやってきたということを伝えたい。

	G	H
役割	キャスト	キャスト、照明
以前	中学・高校で演劇部に所属。高校のときに「青い鳥」に参加。	芝居・舞台を見るのが好き。

きっかけ		正月に行ったコンサートで募集の広告を見た。
参加時の期待感	わくわくしたかった。 同年代や、若い人との人脈を作る。	仕事でピアノの調律をしているので、舞台裏にも興味があり、自分でできたらと思った。 会社以外の知り合いが年齢問わず欲しかった。
実際取り組んで	劇の内容が暗いが大丈夫かと思った。 これがきっかけで図書館で資料集めをした。 みんな良い人で楽しい。新しい考え方を知れて楽しい。学生時代と違って仕事もして結婚もしているので、時間をとるのが大変。集まりが悪い。 体がついてこない。	みんなが経験者に見えたので、本当に役に立っているのかと思った。私がやらなきゃいけない所も出てきたので責任が出てきた。わりじ作りなどやったことなかったことも情報として入ってくる。 皆と仲良くなれた。会社からまっすぐ帰るよりリフレッシュできる。遊ぶよりもこういう所で会話をしたほうが、ストレス解消になる。 十勝の歴史は、脚本を一気に読んで、学校で習っていない底辺の所はすごい話だと思った。
公演への目標	次回の話が持ち上がるようなものになりたい。 当時の大変さを忘れてはいけない。どう表現するか模索している。	照明は直前にならないと出来ないのでは、どれくらい素晴らしいものができるか。 キャストはまだわからない、大変。みんなの迫力がすごくて、自分も出ていいのかと思う。
観客への意識	会社には内緒にしている。 岐阜から来ている親戚に見て欲しい。 新しいものもいいが、当時のお陰で十勝が発展したということを伝えたい。	家族や友達、仲の良い人に見て欲しい。自分が出る所は少しなので、この話を見てどう感じたかを聞いてみたい。長い芝居なのでどうなるか、舞台監督や演出は悩んでいると思う。

	I	J
役割	小道具	衣装
以前	演劇を見るのは好きだったが、やったことはなかった。	おやこ劇場に20年関わっていて、舞台はたくさん見た。音更町劇で初めて照明をやった。
きっかけ	事務を担当しているCさんから誘われた。 変わったことを始めてみたいと思った。	友人が最初から関わっていたので、誘われた。
参加時期期待感	新しいことを知りたいと思った。	歴史の掘り起こし。 自分が何ができるか不安だった。
実際取り組んで	小道具はみんな新人で、教えてもらうというより右往左往している。中心の人がいて指示されると思っていたが、ある程度経つと期待されるようになり、戸惑いはあった。 脚本を読んで、興味を持つものが変わった。 訪ねる場所も、時代考証を兼ねて変わった。 知らなかったことを知れて、前向きな人にたくさん会えた。	当時の写真を舞台工房に貼って、私たちも農作業着を作るときに参考にし、演技する人にも思いを馳せてもらう。当時の歴史は捉えていなかったのも、良い機会に恵まれた。 苦労を重ねた人の表現は、経験を通さないとできない。わりじ作りの経験を通して演技の幅、真実味が出ることを期待している。 出演者70人全員の衣装を考えるのは大変。
公演への目標	時代考証をしっかりとされているので、そういう所に重点を置いている。 リアルなものを置きたいので苦労している。 小道具は大事だと言われている。	寒い中どういう服を着ていたかなど、細かいことは普通知らないのでは、なるべく歴史に忠実に作りたい。私たちは素人なので、舞台上がったらやり直しがあるので不安。
観客への意識	家を空けて来ているので、協力してくれる家族にみて欲しい。それに友達。若い人にも、3時間と長いし明るい感じではないが先人の苦労がわかるので見て欲しい。 暗い舞台で、衣装や道具も暗い感じなので、内容を重視して見てもらいたい。	市民の方が着物を寄贈してくれたり、古着を扱っている人がぼろを譲ってくれたりしたので、その人たちには見てもらいたい。30代や40代の方は先祖の歴史に触れることがない。 50代の方は親や祖母から聞いている。自分の子どもにも見てもらいたい。

参加者の学びとしては、演劇に対する関心、人間関係、新しいことを始めたいという要求から市民演劇に加わってくるが、それまでの演劇経験の差、考え方の違いによる葛藤がある。また、リーダー側は参加者一人一人が主体的に取り組むように仕掛けているが、初心者としては自分に大きな責任があることへの戸惑いもある。十勝の歴史を再発見し、脚本のメッセージに共感し、コミュニケーション、共同作業を通して「良い舞台をつくりたい」という思いを持ち、自分たちの活動の成果を親しい人に見せたいという要求、知り合いに限らず観客に脚本のメッセージを伝えたいという要求につながっている。

帯広におけるコミュニティアート型の創作活動は、作品という域を越えて作る過程の体験そのものが感動を含むものであり、参加者はその感動を観客に伝えたいと感じ、券売という行動に移している。帯広児童劇団ではそれが子どもの教育という共通の関心の中から可能になり、『銀河鉄道の恋人たち』では最初の段階ではそのような意図はなかったが、結果的に作る過程そのものが感動的なものとなった。『十勝伝説』では、リーダー層のはたらきかけによって参加者が学べる環境醸成がなされ、演劇を作る過程がアートであるとう位置づけでそれを市民に見せている。そして、児童劇団では行政がきっかけを作っているのに対し、市民ミュージカルと演劇では行政は補助金を出すのみで、市民でノウハウを積み重ねていけるように取り組んでいる。そういった中でも、プロのアーティストから技術的なことを学ぶ手段として北海道舞台塾など行政の事業を活用している。このような担い手の経験と行政の対応が、帯広のコミュニティアートで培われた方法論といえよう。

6. まとめと課題

北海道舞台塾と帯広市の舞台芸術活動という大きく分けて2つの実践について述べた。帯広市では、創造する人と鑑賞する人の協同による帯広市民劇場の活動から「市民が鑑賞するための芸術を市民が創造する」市民オペラが生まれた。また、演劇においては仲間・家族などの条件、行政が市民劇場で培った創造する立場に立った支援、地域の鑑賞者との近い関係の中でアーティストが活動を展開している。舞台塾の実行委員会という行政・市民の協同も、創造型活動の育成を志向した事業展開から、まさにそのような方向に向かっているといえる。

また、帯広市では演出に取り組む「地域のアーティスト」が合同演劇や市民参加型ミュージカルなどの実践を協同の中で積み重ね、創造する過程そのものをアートとしてとらえ、市民に開示していくという帯広独自の論理を持つに至った。その背景には行政の協力もあったが、市民が企画・運営をできるようになると、行政や財団は財政面、技術面でのサポートにシフトしている。北海道舞台塾の中でも、行政や地域のアーティスト、マネジメント団体などが協同し、外部のアーティストの支援を受けてコミュニティアートの実践が行われており、実行委員会という形式の中から地域に

定着する実践が模索されている段階といえよう。

帯広市では、行政と市民、鑑賞者と創造者の協同が40年にわたって積み重ねられたことにより、地域の人が鑑賞・参加する、地域のための公共的な芸術活動が展開している。行政や財団のアートマネジメントの視点は、創る側と観る側の単なる仲介役ではなく、どのように芸術を創るかというところまで及んでいる。北海道舞台塾の実行委員会の形式も、帯広のような協同を志向するものであり、そこから各地域のアートマネジメントの論理が生まれる可能性は十分にある。舞台塾の事業が終わってからこの協同を発展的に持続できるかが、公共ホールのアートマネジメントの鍵になるのではないだろうか。

地域の公共ホールにおけるアートマネジメントの視点として、北海道と帯広市の実践に即して地域のアーティスト形成、コミュニティアートの展開過程を述べた。これを踏まえたうえで、アートマネジメントの展開過程そのものの実践分析を行うことを今後の課題とする。本論文では「芸術性」の判断に関しては調査対象の発言にゆだねた。しかし、研究者が芸術性の尺度を持った分析を行うことは舞台芸術活動を客観的に比較検討する上でも重要であろう。これも今後検討していきたい。

《参考文献》

- 『地域住民とともに』大前哲彦, 千葉悦子, 鈴木敏正編著 東京:北樹出版, 1998.2
- 『自己教育の主体として』山本健慈, 高倉嗣昌, 木村純編著 東京:北樹出版, 1998.4
- 『子どもの文化権と文化的参加:ファンタジー空間の創造』佐藤一子, 増山均編 東京:第一書林, 1995.8
- 『文化協同の時代:文化的享受の復権』佐藤一子著 東京:青木書店, 1989.10
- 『文化協同のネットワーク』佐藤一子編 東京:青木書店, 1992.5
- 『市民文化と文化行政』森啓編著 東京:学陽書房, 1988.6
- 『文化行政とまちづくり』田村明, 森啓編 東京:時事通信社, 1983.3
- 『文化ホールがまちをつくる』森啓編著 東京:学陽書房, 1991.8
- 『演劇入門』平田オリザ著 講談社現代新書 1998.10
- 『芸術立国論』平田オリザ著 集英社新書 2001.12
- 『コミュニティ演劇ワークショップのすすめかた』財団法人北海道演劇財団 2000.3
- 『イベント創造の時代 自治体と市民によるアートマネジメント』野田邦弘著 丸善ライブラリー 2001.1
- 『文化政策入門 文化の風が社会を変える』池上惇 端信行 福原義春 堀田力 編 丸善ライブラリー 2001.2
- 『アートマネジメント研究 第1号』日本アートマネジメント学会編集 美術出版社 2000.9

- 『演劇講座 同時代の演劇と社会 報告集』北海道演劇財団 1997.1
『谷は眠っていた 富良野塾の記録』倉本聰著 理論社 1988.12
『「行動変容のパフォーマンス」ドラマ化という手法から見えてくるもの—自己表現の本質を探る—』太宰久夫著 日本保健医療行動科学会年報 メジカルフレンド社 1995

《参考資料》

- 『北海道舞台塾 日本劇作家大会'99 北海道大会』（大会資料）北海道文化財団, 日本劇作家協会 1999
『平成11年度 北海道舞台塾 北海道大会 報告書』財団法人北海道文化財団 2000
『1999文化年報』財団法人北海道文化財団 2000.2
『平成12年度 北海道の文化振興施策の概要』2000.8
『北の舞台芸術祭』（大会資料）北海道文化財団 2000.12
『平成12年度 北の文化塾開催事業 アートマネジメント講座「地域をプロデュースする」』財団法人北海道文化財団 2001.2
『北海道文化財団 一年のあゆみ 2001年版』財団法人北海道文化財団 2001.12
『オペラ・サロン 舞台芸術が生み出すもの～地域の市民オペラから～座談会参考資料』財団法人北海道文化財団 2001.11
『生涯学習ガイドブック おびひろ 平成13年』帯広市教育委員会 2001
『おびひろ市民劇場のしおり—市民会館を拠点に芸術文化の市民的な交流の広場を創る—』帯広市民劇場運営委員会 1964
『おびひろ市民劇場だより』第22号～第24号 帯広市民劇場運営委員会 1999.3～2001.3
『帯広市民オペラ記録誌』帯広市民オペラ記録誌編集委員会 1999.2
『帯広児童劇団第15回公演 キューソネコカミねこひげたてる』（公演パンフレット）2001.11
『ミュージカル・エレジー 銀河鉄道の恋人たち—80'S 全曲集（台本付）』作・大橋喜一 作曲・青山昌弘 アーク出版 1995
『ミュージカル「銀河鉄道の恋人たち」記念文集』『銀河鉄道の恋人たち』実行委員会 1995
『帯広開拓百二十年記念 十勝伝説』（脚本）作・布勢博一
『演劇「十勝伝説」公演資料』十勝伝説実行委員会 2001
『演劇「十勝伝説」ニュース たららん』vol.1～11 十勝伝説事務局 2001.6～11

注

¹佐藤一子著『文化協同の時代』青木書店 1989

²森啓「文化ホールが文化的なまちをつくる」森啓編著『文化ホールがまちをつくる』学陽書房

1991

第一に「市民が自ら行う文化活動を活発にするための事業」、第二に「地域の文化活動の種を蒔き、育てる『養成』と『支援』の事業」、第三に「地域にオリジナルな文化をつくる事業」、第四に「プロの芸術・芸能を鑑賞する事業」、第五に「『文化のプロデューサー』を養成する事業」を挙げている。

³利光功「アートマネジメントの理念」日本アートマネジメント学会『アートマネジメント研究 第一号』美術出版社 2001

⁴平田オリザ『芸術立国論』集英社新書 2001

⁵よく取り組まれている演劇の場合、体の動きや発声、他者とのやりとりを体験するプログラムを行い、実際の役者を養成するためのもの、日常の人間関係や生活に還元するためのものなどがある。

⁶「舞台芸術活動に対する道民の皆さんの参加の促進と裾野の拡大、舞台芸術活動を担う意欲ある人材の育成、舞台芸術活動を通じた道内外の人々や地域との広範なネットワークづくりなどを通して、本道の各地域における舞台芸術活動の一層の活性化を図ること」

⁷北海道文化財団、北海道舞台塾を開催した20の自治体の実行委員会へのインタビュー、見学（一部）及び大会資料による分析による。調査期間は2001年2月～9月である。

⁸日本劇作家協会とは「プロ・アマを問わず自らを劇作家とする全ての人々が参加する開かれた協会」であり、（大会資料）1999年当時で会員約500名。戯曲文学の普及・発展、劇作家同士の交流、舞台芸術の発展に貢献することを目的とする。

⁹地域大会は、初年度の1998年は道内の主要都市である旭川市、函館市、釧路市を中心に、1999年はこれらに帯広市を中心とした十勝、端野町を中心としたオホーツク、北広島市を加え6地域、2000年と2001年は十勝、オホーツク、室蘭市を中心とした西胆振、富良野市の4地域にて行っている。

¹⁰財団は1984年に施設の管理・運営を目的に設立され、文化課・市民劇場とのすみ分けが模索されている。現在のところ文化課は市の施策に基づく全体的な事業、財団はホールの管理や招聘事業・地元の文化祭などの企画・運営、市民劇場は文化団体の支援、創造事業という役割分担になっている。

¹¹事務局（文化課）担当者、運営委員及びこれらの経験者へのインタビュー、資料による。

¹²文化課の市民オペラの会役員、帯広交響楽団へのインタビュー、資料による。

¹³調査した段階では随時募集しつづけているが、予定人数にはまだ足りない状況だった。

¹⁴演劇関係者3人へのインタビューによる。

¹⁵帯広市児童会館の担当者・演出の石田さん・団員（児童）、母親へのインタビュー、稽古・公演の観察による。

¹⁶1964年に建設された児童対象の社会教育施設である。十勝管内の小中学生が1泊2日の日程で館の指導員のもと科学実験などを体験する宿泊学習、科学・文化のクラブ活動や行事、プラネタリウム放映や天文台の開放、科学展示室の開放、乳幼児と親が遊べる木のおもちゃを置いた「もっくんひろば」の開放など、小中学生の科学館・文化センター、乳幼児と親の遊び場・交流の場として機能している。

¹⁷入団は中学2年までだが、前年から継続の場合は中学3年まで活動できる。

¹⁸演出の石田さん、作曲家、制作部長へのインタビューと実行委員会実施のアンケート、資料による。

¹⁹この作品は、明治29年に岐阜から十勝に入植してきた主人公中井正三郎・キク夫妻が、家族の絆をたよりに、ともに入植した岐阜の仲間とともに子どもの死、開拓の困難さ、大水害などを乗り越え、土地を開いていく姿を描いている。後半は、子どもや孫が生まれ、時代の変化とともに活躍している姿を描く。

演出の石田さん・制作部長・舞台監督・参加者へのインタビュー、稽古と歴史学習（わらじ作り）の観察による。

²⁰演劇づくりのようすやこれからの活動を載せた機関紙を月2回発行し、参加者に配布するほか十勝の社会教育施設や文化施設に置いている。